法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<隨想>テレビ映画館

佐川, 誠義 / SAGAWA, Masayoshi

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
43
(開始ページ / Start Page)
79
(終了ページ / End Page)
79
(発行年 / Year)
1990-11-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019619

随想

テレビ映画館

佐川誠義

学生時代はとかく暇のほうはいやというほどあるのに、金のほうはどうしようもないものだ。最近は事情が変わってきたようだが、私のころはそうだった。そういうときには生き方がとかくネガティブになりがちなものだが、金をほとんど使わずに心を豊かにする方法がないでもない。

ただし一台のビデオデッキと2、3本のビデオテープが最低条件として必要だ。これを使って、テレビで放映する映画をすべて見るというのはどうだろうか。昔はテレビの映画というと、夜の9時からやく2時間のものが週に2、3回あるだけだった。ところが今はそれにくわえ、真夜中に膨大な数の映画が放映されている。しかも重要なのは、後者のほうに古典的名作や芸術作品が集中しているということである。これを1年間つづけたら諸君は映画に関してひとかどの知識と意見をもつことができる。

しかしただ漫然と見ているだけではだめだ。見た映画の題名と監督名はかならず手帳にでも書きとめるようにしよう。とかく映画はスター中心的になるが、映画を真に作っているのは監督だからである。その事情を反映してか、最近映画作家という語が使われるようになった。それに映画事典類を参照する時もスターの名ではひけない。いちばん痛切にこのことを感じるのは外国の事典をしらべるときで、その国でどういう題名で公開されたかも判らないとき、頼りになるのはただ監督名である。

こうして映画を見てゆくと、監督の作風までが感じ取れるようになる。そうなったらしめたもので作品にたいする自分自身の意見をもち、自分の見たいものを自分の力で選べるようになる。換言すると、今の諸君にはその力がないと、私は言っていることになる。まだ諸君はマスコミの宣伝におどらされているだけだ。マスコミにたいして、抵抗力をつけるには、ただひたすら映画を見るしかない。

またいわゆる名作主義にも、私は断固として反対する。名作というのも、主としてマスコミが決めたもので、ベストテンとかグランプリがあてにならないことを、私はくりかえし述べている。今はひろく名作とされている『お熱いのがお好き』は当時ベストテンにもはいらなかった。またベストワンに選ばれた作品が今の評価では二流作品に転落している例も多い。

私のこの提案は、おそらくネクラで、いわゆるおたく族を奨励しているようにうつるかも知れない。しかし根本的なところでちがいがある。テープを保存することに私は価値をおかないからである。映画は映り去ってゆくものだ。だから見たテープはどんどん消して、新しい作品を録画するようにしよう。音楽とちがい、いま見た映画をすぐまた見たいと思うことなどめったにあるものではない。それに名作は半年もたつと、また録画する機会がめぐってくる。最初にテープ2、3本と書いたのはこのためである。さあ3本パック1500円の資金で、映画の広大な世界に旅立とうではないか。

（文学部教授）